

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 夏目漱石 『ころ』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 129 回のツイキャス読書会の課題図書は、夏目漱石の『ころ』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

青空文庫 夏目漱石 『ころ』

https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/773_14560.html

「Kの苦悩」

異常な程に学問に取り組むKを見かねた先生は遊びも重要だと忠告をする。
するとKは答える。学問が目的ではない、強い意志を養うのだと。
Kにとって生きるということは強靱な意志を必要とする過酷な営みのだろう。
私はそう感じた。

Kはこの世で生きることは何の意味もないのかもしれないと悩み苦しんでいたのだと思う。
無意味なことの繰り返しに神経衰弱に成るほどに苦悩しながらも何か意味を見つけようと尋常ではない程に本を読み、
考えていたのだろう。

仏教を学び、聖書やコーランそして神秘思想家のスウェーデンボルグなどを読むことでなにか信仰の道を歩もうとした
のかもしれない。超越した世界の存在を信じようとしたのだろうか。
しかし信仰への一歩を踏み出すことは出来ずにいたように見える。

Kは彼岸と此岸の狭間で悶え苦しんでいた。
その苦しみの中で生き続けるための意志を必要としていたのだと思う。
現実に生きながら、その向こう側を見詰めながら生きていた希少な人なのだ。

叔父に騙され、人間に対して疑いの目を持つようになった先生と世界全体に対して疑いを持つKとでは、その絶望の
差は余りにもありすぎるために先生にはKのところが理解出来ずにいたのだろう。
Kは娘さんに恋をするが、先生に先を越されてしまう。
「精神的に向上心のないやつは馬鹿だ」という
この言葉はKにどう響いたのだろうか。

後日、Kは自殺をしてしまう。
聖なる道も俗なる道も歩めない自分の意志薄弱さに嫌気が差したのか。
あるいは、超越を信じ、小さなナイフで精神と肉体を切り離すことができるのではないかと賭けにでたのか。私には分
からない。
今回の出来事がなくとも遅かれ早かれ自殺をしてしまったのではないかと私は思ってしまう。
Kはそういう危うい人なのだと思う。

(おわり)

『「殉死の精神というメッセージ」から読み直す漱石の『こころ』』

今回で4、5回目になる漱石の代表作『こころ』

改めて読み直すまで、『こころ』は好きじゃなかった。だって「先生」は自分勝手だし、「御嬢さん」は計算高いし、なによりも「K」が可哀想でならなかったからだ。読後に憂うつな気分になった。

それとは対照的に、ぼくは漱石の小説の中では『三四郎』が大好きだった。読後に、爽快感みたいなものが残るからだ。主人公の「三四郎」に自分をかる〜く投影できた。それに、「広田先生」はカッコいいし、「与次郎」もなぜかきらいになれない。

話を『こころ』に戻す。

ぼくは、「先生」を誤解していたのかもしれない。先生はとても優しくかった。「自らの葛藤」とKを重ね合わせて、Kを救おうとした。しかし、「御嬢さん」も好きだ。とても、好きだ。Kと御嬢さんと先生の「三角関係」…… 矛盾している。まさにパラドクスだ。でも、それこそが「人」である…… と先生は遺書として自らの過去の善悪の体験を「人様に伝えたかった」のではないか。

先生は、とても優しい、思いやりのある人だった。

最後に、とても印象的だった箇所を引用したい。

(引用はじめ)

「渡辺華山は邯鄲(かんたん)という画を描くために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先達で聞きました(略)半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。」 新潮文庫 P326 L6

(引用終わり)

大卒後、長らくフリーターを続けていた私のコンプレックスを少しは解き放してくれたのかもしれない。

先生の遺書は、私も少しは受け取れたのかもしれない。

ありがとう、先生。

これからも、よろしくおねがいします。

(おわり)

心を捨てるか、死ぬか

『こころ』は以前読み、今回はさっと目を通すくらいしかできなかったが、やはりどんよりと暗い気分になる。いや、その言い方はフェアではない。漱石は、純粋な心で生きる人間の苦しみを描いてみせた。世間に汚れても人を傷付けても気にしない人やパリピには無関係で意味不明だろうし、漱石も彼らに向けては書いていないだろう。メッセージの1つとして「あとで気付いても遅い」があり、だからこそ自分と似ていてかつ理解しうるであろう「私」が選ばれたのだ。

文章は惚れ惚れするくらいだが、ひたすら人間心理の奥底と向き合わされる。まるで瞑想して自分の内面を見つめさせられているようだ。

自分の解釈を思い切って言うと、漱石は近代に絶望したうえ、行動に移さずともうっすらと自殺願望があったのだと思う。腐りきった世の中に〈純粋さ〉つまり一群の作品を残して、疲れ果てて死んでしまおうと思っていたように感じる。

そして、乃木希典の殉死を聞いた時にどう思ったか。これは小説での先生の言動からも伺えるが、「自殺するには絶好の理由であり時期だ」と思ったに違いない。当時、自殺は今以上に忌むべきものだった。だかく明治の精神に殉死したとなれば、自分の名誉も保たれ、ひいては妻の世間体に傷が付くこともない。むしろ立派な夫婦ということになる。漱石のアイロニカルな性格からして、そんな死に方をまず思い付き、そこからできた物語なのではないかと推測した。

もちろん先生は、いわゆる殉死をしたわけではない。自分の苦しみが深く、本当は明治が終わろうとどうでもいいのだ。あえて絡めて言えば、明治すなわち近代と刺し違えたと思う。この馬鹿げた時代を終わらせよう、と。

しかし先生の死後も漱石の死後も、日本人は欺瞞を続け心を失い続けている。その方が楽で、むしろ〈幸福〉に生きられるシステムだからだ。漱石の文章に接することで、ありし日の日本人の心を蘇らせ、心の機微を理解し、少しはまともに生きようと思える。だがそこに、近代的ないわゆる幸福はないだろう。救いがなく、先生のように苦しむだけかもしれない。その上でどういう生き方を選ぶか。それが主人公の私と読者に対して与えられた課題だと思う。

(おわり)

「止められない自殺」

私はKが自殺しないためには、どうすれば良かったのか考えてみました。

先生がお嬢さんへの気持ちを内に秘めて、抜け駆けしなかったら……。

- ① お嬢さんに告白したが、あっさりフラれて自殺。
- ② お嬢さんと両想いになった場合、奥さんは反対するだろうから、二人は駆け落ち。
 - A、最初は仲良く過ごしたけれど、お金がなくて二人は青梅雨のように命を絶つ。
 - B、お嬢さんの気持ちが離れて自殺。

私の貧相な想像力では、Kは長く生きられないなと思いました。

前回の読書会で解説されていたように、黙って下宿を一人で出て、托鉢を貰いながら放浪していれば自殺はなかったのかもしれない。

残念だけど、誰かと関わる事によって絶望して結果、自殺するというようになるのかもしれないなと思いました。

先生が、おせっかいのような親切心で、呼び寄せた時に断りきれなかった事で、Kの運命は決まってしまったのかもしれない。

Kもその時、先生の誘いを振り切って一人で生きて行くという選択ができなかった弱さが自殺する事になったのかもしれない。

自殺するしかない！ という選択しか出来ない人は気の毒だと思うけど、やっぱり自殺は良くないと思います。

自殺をする事で、全然関係なさそうな周りの人たちも、不幸の渦に巻き込んでいくという事を、色々な小説を読んで思いました。

もしかしたら、夏目漱石も自殺は良くない！ と思っていたから、Kの死によってその後の人生を狂わされる、先生や書生の私という登場人物が出て来たのかな？

もし、そうだったらいいなと、一人で勝手に思いました。

(おわり)

REM

私が未だに分からないこと、それは死後の世界はあるのかどうか？である。

今現在地球上には 70 億人以上の人間が住んでいる。

その人達が一斉に死んだら、死後の世界の人口過密は甚だしいものとなるだろう。

死後の世界で自分の祖先に会えるのか？そもそもどこまでが自分の祖先に含まれるのか？

そこにかつて飼っていた犬やアヒルはいるのか？恐竜やマンモスはいるのか？虫やら単細胞生物にも死後の世界はあるのか？

などと考える。

肉体がその機能を終えた後、内に秘めた意志や覚悟はともに潰えるのだろうか？

そもそも心臓が止まった肉体的な死だけが死なのだろうか？とも思ったりする。心臓が動いているのは感じるけれど、本当に私は今を生きているのだろうか？

今まで私が殺めたり、食ってきた生き物は今の、そしてこれからの私に薄れずに影響を与えるだろうか？

私が死んだら世界はどうなるだろうか？何も変わりはないか。

そんなことも今回こころを読んで考えた。

更に、私が我が子に「生まれる前は赤ちゃんの国にみんないたんだよ。そこからこの世界に、僕らの子供に産まれてきてくれてありがとう」と語ってきたが、なら自分はどうだったんだろう？と思ったりもした。

自分は意志を持って生まれてきたのだろうか？

他人の心は分からない。Kのように黙して語らない人はそれだけで近寄りやすい。

けれど自分のこころも分からない。心がどこにあるかさえ分からない。

自分が日本人じゃなかったら？自分が生まれていなかったら？

新元号の時代を迎えるなんて世の中は騒いでいるけれど、私は心ここに在らず。

数珠の数を数えるように、答えの出せない問題を挙げ連ねて床に就いています。

まだ起きているのか？とKに問われたら、体は眠っている、けれど頭は覚醒していると今夜は答えよう。

(おわり)

『ころ』感想文

私が『ころ』に惹かれるのは、他者へと向かわずにはいられない、人間の心が描かれているからだ。

「目的物がないから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きたくなるのです」

先生のこの言葉を読んでいて、人はそれぞれの欠乏によって動かされ、動いて新たに欠乏を抱え、一生を過ごしていくのだなと思った。

叔父とのいざこざで厭世的な心で住居を探していた先生は、お嬢さんのいる下宿を探し当てた。

「未亡人と一人娘と下女より外にいない素人下宿」と聞いたとき、先生の心にはすでに恋に対する無意識の期待があったのではないかと思う。

傷ついた先生の心は、先生も気づかないうちに、愛を求めているのではないだろうか。

けれど、欠乏は、愛や人間関係で埋まるものだろうか。

そして生殖本能に関わる恋愛では、「高い端」と「低い端」が密接に絡んでおり、ややこしい。

先生は「高い端」でお嬢さんを想っていたと言っているが、宗教心のような気持ちで相手を想うのは危険だ。

「純白なもの」と決めつけてしまう先生のお嬢さんに対する愛は、読んでいてもやもやとした。

先生もKも、相手が静では無くても、若くて綺麗な女性ならば誰でも同じような状況になったのではと思う。

2人が静の何に惹かれていたのか、よく分からない。

Kに嫉妬を始めてからの先生は、とても醜い。三角関係を唯一把握している当事者として、ずるく立ち回っている。

でもその醜さから目が離せない。状況が違えど、私も人生のどこかで同じような心の動きを辿ったことがあるからだ。

他者との関係で苦しむ人間の姿がきめ細やかに描かれており、胸を打たれる。

一方Kは、生まれ持った欠乏がとても大きかった人だ。

「道」を求めて精進するK。Kの言う「道」とは何なのか、読むたびに考えているのだが、「真実」ではないかと思う。この世に生きるそもそもの意味、世界の成り立ちのようなもの。医者勉強ではそれは得られないと判断したKは、やがて故郷から切り離されて孤絶し、神経衰弱になってしまう。

先生に下宿に連れてこられたKは、卵から出て初めて見たものを親鳥と思うように、お嬢さんを恋してしまう。

「道」を求めるKにとって、これは許し難い事だった。Kの精神と、愛を求める本能とが離れすぎていたのだ。

自分の中の矛盾に耐えきれなくて、Kは自殺する。

もし先生が下宿にKを引き入れなかったら、もしKが先生のお嬢さんへの想いに気付いていたら…などと考えてしまうが、Kの持つ欠乏は大きすぎて、Kを飲み込んでしまった。

そして学生は、先生に言われて初めて胸の中を調べ、「案外に空虚」であることを発見している。若さゆえの欠乏に動かされて、先生へと向かう。

K の墓所で呑気そうに墓石を読み上げてみたり、先生がうろたえるほど頻繁に自宅を訪ねたり、その無遠慮さに先生はあきれながらも、次第に心を開くようになった。

死んだように生きていた先生にとって、学生との出会いが状況を変化させるきっかけになるのかと思っただが、自殺へと進んでしまった。

先生の死により、学生の心には新たな欠乏が生まれるだろう。

危篤の父親を放って、先生の元へ向かい電車で飛び乗る学生。その先で、どんな心の動きをするのだろうか。

(おわり)

『ころ』 感想文

読み終えたら、頭に残ったのは「先生と遺書」の章だけだった。

両親が亡くなったとはいえ、先生にとって何の陰りもなく、絶対である故郷が叔父によって、相対化され、値段がついて、それを処分して故郷と決別しなければならなくなる。

何と無防備でお人好みな人物だと思った。

平和ボケした日本人の原型は明治、そして大正にはすでにあっただと感じた。

この後、人間不信に陥っても、それは自業自得だ。先生は責任を受け止めて、しっかり生きるしかないと思ったが、ストーリーの展開はそうはいかなかった。

次に先生が絶対化したのはお嬢さんだった。先生はお嬢さんと独占的に接触でき、何の憂いもなかった。

先生は「自分の欲望は他人の欲望である」ことを、ア・プリオリに認識できる人物ではなかった。

Kがお嬢さんへの恋心を先生に打ち明けることによって、先生にとって絶対的であったお嬢さんは、相対化し、先生は相対化の極地であるお嬢さんの所有＝結婚へ向かわなければならなくなった。

先生はKにお嬢さんを諦めさせるために、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という致命的な言葉を利用した。

まさに、裸の王様に裸であることをすっぱ抜いたのだ。

だが、この言葉は先生にも返り血を浴びせた。

数年後、Kを自殺に追いやったという罪悪感から孤独地獄に堕ちてしまった先生も自殺する。

人間の本質にはエゴイズムがあることを知ったのだと思った。

「おれは策略で勝っても人間としては負けたのだ」という言葉は、漱石の“精神主義”思想の破綻を物語っていると思った。

死後に届いたと思われる遺書という形式が、能の幽玄な世界を連想させた。

喪失した誠(まこと)＝到達し得ない自分、を追いかけて、思いを残して死んだ先生の亡霊が、「青年の私」の前に現れて思いを切々と語っているように思えた。

漱石と言えば自己本位など西洋的なものをイメージさせるが、深層部分には古い日本が封印されている、と思った。

(おわり)

『 K の告白 』

自分の人生は、すべて自分のものだと思っていた。
人生を自分だけのものにしたければ、誰も介入させるべきじゃなかった。
だが、決して他人のせいではない。自分の心の弱さが招いたことだ。
精神的に向上のない馬鹿は俺だった。
今、手の中にあるナイフを握りしめながら…そう思う。

養家を三年も欺けば、勘当は当然の結果だ。
しかし、自分を養子に出した実家も、医者にするために養子をもらった養家もそれぞれの勝手ではないか。俺は、自分の選んだ「道」をいく一択しかないゆえ仕方がない。
だからこそ、誰をも欺かず、夜学の教師をしながらの勉学は充実していた。だが、肉体をいかに鞭撻しようとも、精神はいかんともできなかった。
そんな俺を見かねて、あいつ(先生)が余計な仕事をするなどのたまいだして、迷惑だった。幼馴染でなければ、聞く耳はもたなかった。
だが、俺と一緒に「向上の道を辿っていきたい」とひざまつくではないか。
あいつの下宿を訪れたのは、疲れと幼馴染の必死の口説きからだ…いや、いい訳かもしれない。あくまで「道」のための時間を確保したい欲からだ。
しかし、その欲ゆえにこのような結果になるとは。
まだ、手の中のナイフはひんやりしている…。

自分の「道」の行く手を邪魔する者は排除してきた。実家や養家しかりだ。ましてや、女なんて最初から必要がないと思っていた。
しかし、お嬢さんと接すると体の奥から突き上げる感情に戸惑う。自らを制御できないことなんてあるのか？
このあたたかい感情にふと身を委ねる自分に、一番自分が驚いている。知ってしまえば、知らない時に戻れない。どうすればよいのか…？

あいつのお嬢さんへの気持ちは、すぐに気がついた。そんなあいつにこの感情を殺してもらうのは酷なことだろうか。きっと、体を張ってでも諫めてくれるだろう。悔しいが、本能的なお嬢さんへの感情は自分では止められない。
だが、そんな甘い考えはすぐに打ち砕かれた。我を失っていた自分にあいつは「精神的に向上心がないやつは馬鹿だ」と言い放った。それは、かつての自分の言葉がブーメランで戻ってきたのだ。他人の言葉より、自らの信念が突き刺さるほど、こたえるものはない。私はその時、完全に「覚悟」したのだ。
私の覚悟にあいつは、お嬢さんを奪われるかもしれないと怯えていた。
そうではない。正気に戻った俺は、一瞬でも「道」を見失った自らを恥じたのだ。
せめて、この下宿の部屋で…。
決して、あてつけではない。最後にあいつの姿を覗いた。
自分の不器用さにもほどがあるな。
ああ、こんなことを思ううちに、ナイフがあたたまってきた…。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。
ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『1→0 無への移行 令和の精神』

0 の概念は、6 世紀にインドで発見された。「何もない」、すなわち「無」を記号で表し概念化したのだ。おにぎりは食べればなくなる。1 から 0。おにぎりが 0 個というのは、存在していたものが無に移行したことを示す。

1→0 存在していたものと、存在していたものの無への移行。無は、現象から無への移行を示す。人間は無に移行する。生きることは現象化であり、死は、現象から無への移行だ。

「自分は薄志弱行なので到底行先の望みがないので、自殺する」とは K の遺言である。

自殺した K は、先生の目の前で、無に移行していった。

無が存在するのではない。無への移行だ。存在したから無がある。現象化し、存在したことの無いものが無に移行することはない。自殺も殉死も、自発的な無への移行だ。1→0 への移行である。

自殺も殉死も、もはや、生きようと欲しないことである。ショウペンハウエルは『自殺について』において、生きようと欲しないこと、すなわち「生きんとする意志の否定」を非意欲(非意慾)と名付けた。自殺や殉死は、非意欲である。

(引用はじめ)

我々は、非意慾については、単にそれはいりこんでくるものであるということ以外には、特にその現象というのは何も知らない。しかも、その非意慾は、もともとすでに意慾の現象に属しているところの個体のなかだけにはいりこんでくるものなのである。そこで、我々は、個体が生存している限り非意慾がいつも意慾と戦い続けているのを見ることになる。『自殺について』P.84

(引用終わり)

K の自殺は、先生の人生を変えた。K の 1→0 の以降によって現れた「無」は、先生の頭の中に入り込んできた。そして、先生の生きようとする意欲が、無と戦いはじめた。

近代の市場経済には、無としての 0 が溢れかえっている。デジタル空間の中で、人間の信用の 1→0 のプロセスとしての貨幣は限りなく膨張し、非意欲が意欲を呑み込んでいく。

勤労意欲は、非意欲に侵食される。それは死んだ K が、先生の意欲に侵食していったのに似ている。明治天皇崩御も、乃木將軍の意欲を侵食していったのだ。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343